# こうちミュージアムネットワーク通信

March 2006 vol.4

目次

P1・・・土佐の文化財「親面」
P2・・・随想「絵金蔵と赤岡の町おこし」・文化の言葉「塼仏」
P3・・・会員紹介「高知城懐徳館」「国際交流の館ジョン万ハウス」「定福寺」「佐川地質館」
P4・・・活動報告「棚橋賞受賞に思う」・時の話題「ギャラリートーク」
P5・・・コラム
P6・・・現場通信「博物館の危機管理」
P7・・・展示会批評「描かれた土佐の浦々」を観て
図書の窓「山内一族 山内一豊と妻の生涯」
P8・・・情報コーナー・会員一覧

## 土佐の文化財

### 親　面（おやめん）

縦三五・六センチ、横二二センチの大型仮面である。目や眉、鼻が大きく作られており、デフォルメされたマンガのようだ。「日本じゃないみたい」「南方のものではないか」とよく言われる。

この仮面は、香美市物部町の太夫の家に伝えられてきたもので、普段は門外不出の神秘の仮面だった。直接さわることさえ恐れられており、さわった人が死んでしまったという話もあるくらいだ（私は触らざるをえないのだが…？）。持ち主が亡くなると、県に寄贈され、今は県立歴史民俗資料館の収蔵庫にある。

集落に疫病が流行ったり、不幸や災難が続くような時に、この面をつけて「鎮め」という行事を行なった。この面が鬼役で、太夫に問いつめられ「もう人取りはしない」と約束する。不幸をもたらした鬼が「人取り」＝「人間を死なすようなこと」はしないと約束することで、人々は災いが鎮まることを信じ、願ったのである。

面の裏には、「祈」「永禄十年／十一月廿一日」の墨銘がある。永禄一〇年（一五六七）と言えば、長宗我部らが争っていた戦国時代。その時に、この面は何を祈って作られたのだろう。

（高知県立歴史民俗資料館　梅野光興）

親　面
永禄10年（1567）
（高知県立歴史民俗資料館蔵）

随想

# 絵金蔵と赤岡の町おこし

絵金蔵長　横田　恵

絵金蔵は、土佐で活躍した芝居絵師・絵金の芝居絵を収蔵・展示する施設で、幕末土佐の文化の一翼を担った絵金の紹介と、赤岡の町づくりの拠点として作られました。

開館当初から注目されたのが、町立施設の絵金蔵を町の住民が運営するという体制です。運営主体は二〇数名の住民組織「絵金蔵運営委員会」ですが、みな本職を持っているため、夜に集まり絵金蔵の企画・運営を話し合っていて、議論が白熱して日付が変わることもしばしばあります。

開館中の日常業務は、私を含む二人の職員で、受付や解説、経理、業者・取材対応、学芸・企画、その他雑務を行っていて、どの施設の職員も同じだとは思いますが、まさに「何でも屋」状態です。

そこで助っ人となっているのが二〇名を越える町のボランティアの皆さん。そのほとんどは職員の母親や祖母（私の祖母をこえる年齢の方もちらほら…）の年代ですが、元気いっぱいです。

団体予約が入っている時はどこからともなく集まり、受付や誘導、お茶のお接待まで張り切って行ってくれます。絵金蔵の客層は県外の方が多いのですが、評判がよく、「心温まる対応が嬉しかった」とお礼の手紙が届くほどです。お客様は、素朴なもてなしや、幅広い世代のスタッフが賑やかに運営しているのをどこか懐かしく感じていらっしゃるようで、お客様も世間話やご自分のお話をしてくれます。

そしてスタッフ以外に、商店街の方にも絵金蔵の紹介や道案内、チケット販売などを協力してもらっています。昭和四〇年代を境にして人通りが減った商店街ですが、絵金蔵開館後、駐車場を商店街の端に設け、町を歩いて絵金蔵にお越しいただく、という仕掛けをつくったことで、一五、〇〇〇人のお客様が商店街を歩いています。まだ直接商店の利益には繋がっているとまではいえませんが、往時の商店街の賑わいを少しでも取り戻しつつあるという感触が、商店街の元気の源になっているとのことです。

このようにたくさんの赤岡の住民が盛り立てている絵金蔵ですが、開館して突然皆が町づくりに関わったのではなく、平成五年には、絵金の描いた芝居絵の題材を演じようと「土佐絵金歌舞伎伝承会」の結成、七年には絵金関連グッズを開発する主婦の団体「やつゆ会金木犀」の発足、また同年、赤岡の古い町並みを活かしてフリーマーケットを行う「冬の夏祭り」の開始を経て、九年にその団体が集まって「絵金を核としたまちづくり事業」が始まります。そのなかで絵金蔵をどのように作ろうかと色んなアイデアを住民が提案し、今の絵金蔵ができました。

こうした一五年近くに及ぶ活動でできた「わたしたちの」絵金蔵。関わることで報酬は職員以外にはありませんが、この思いが絵金蔵に関わるメンバーの原動力です。

さらに来年度には、昭和戦後まで賑わった芝居小屋「弁天座」を絵金蔵の横に復活させようと住民が集まり、現在ワークショップを行っています。一八年三月の市町村合併を控え、赤岡町としては最後となる町づくりの拠点施設・弁天座。隣の絵金蔵と連携してうまく活用しようと、みんなで奮闘中です。

自治体の施設を、民間を含む団体に委託できる「指定管理者制度」。私は小規模の文化施設は住民運営が理想だと思っています。そうすることで赤岡のように、住民一人ひとりが施設や文化を理解し、盛り立てて、それが元気にも繋がるからです。しかし絵金蔵は専門家がおらず、住民の経験を頼りに運営しており、まだ課題は山積です。また財政面でも安定性があるとはいえません。現在は赤岡町自治体から財政面だけでなく運営面でのノウハウや、時には住民として手足となり支援をしていただいています。合併後も自治体との関係を維持していくこと、そしてこれから住民自らが学ぶことが大切です。

今まで不安ながら住民のパワーで走ってきた絵金蔵。蔭で努力を積み重ね、助けてもらいながら、パワーアップしていくつもりです。皆さん乞うご期待！

弁天座のワークショップ

## 文化の言葉

### 塼仏（せんぶつ）

塼とはいわゆるレンガを指し、原型に土を填めて成形後、焼いて完成させます。原型があれば大量生産が可能で、また型に様々な文様をつければ寺院や墳墓などの装飾に用いることができます。元々は中国で発達しましたが、日本では七世紀～八世紀頃を中心に製作されたようで、飛鳥・奈良時代の寺院跡等から出土します。奈良県の川原寺跡では同じ形式の三尊像が多く出たことから、堂内の壁に張りつめられていたと推測できます。一方、法隆寺には単独で信仰された像が伝来し、仏像の需要増に対応して木像や金銅像の代用とされたケースもあったものと考えられます。

ところで近年、高知県内でも初めてこの塼仏が発見されました。土佐市の野田廃寺跡からです。上半身だけの小像で、顔の部分が磨耗しているのは残念ですが、流麗な垂髪や頭飾、胸前の水瓶らしき盛上がりはおそらく観音像と思われます。県内では奈良時代以前の仏像は、他に二軀しかなく、極めて貴重です。また古代の寺院跡も限られているため、当時の寺院の形態、信仰の様子を知るうえで重要な示唆をあたえるものとなりました。土佐の古代文化に新たな光をあてる久々の発見といえそうです。

（高知市生涯学習課　梶原瑞司）

# 会員紹介

## 高知城懐徳館

高知城懐徳館は本来本丸御殿のことですが、明治六年（一八七三）に高知城が公園になるとき施設全体を総称して懐徳館と名付けられました。

高知城は、天守や本丸御殿を始めとして一五棟の建物が国の重要文化財指定されており、全国に残る一二の木造天守の一つとして非常に貴重な文化遺産です。

また、天守に接続して本丸御殿が完全な形で伝えられている全国唯一のお城です。

天守は、三層六階の構造で最上階の六階には、回り縁と高欄を巡らしており、回廊から眺める高知の街並みや、北山の姿は私たちの心に安らぎを与えてくれます。

本丸御殿は、式台廻り、正殿、納戸蔵からなっており、正殿は書院造りの建築様式で、山内一豊公が浦戸城から移転してきた一時期、ご夫妻は本丸御殿で生活していたと言われています。

本年は、四月から始まる「土佐二十四万国博特別展」の会場として多くの観光客の方の入館が予想されており、職員一同、より一層あたたかいおもてなしを心がけています。

（高知城管理事務所　伊吹清英）

## 定福寺

当山は聖武天皇勅願により、神亀元年（七二四）に行基によって開山されました。

本尊は阿弥陀如来。阿弥陀如来坐像を中心に薬師如来坐像・地蔵菩薩半跏像が安置されています。いずれも平安時代後期の作です。本尊三尊をはじめ、地蔵菩薩立像六体・毘沙門天立像・不動明王立像・聖徳太子立像は県指定文化財です。地蔵尊は浄土思想の影響を受け特徴的な『笑い』を浮べています。

本堂は安永八年（一七七九）、土佐山内家九代藩主豊雍公によって再建されたものです。

境内には土佐豊永万葉植物園（大賀蓮）・町立民俗資料館（二、五九五点は国指定有形民俗文化財）が併設されており、豊かな自然の中、山野草観察や地域の生活文化に触れることができます。

奥ノ院（仏岳山遍照院）は弘法大師若年修行の地、加持ヶ峰（梶ヶ森）の八合目に位置します。本尊は丹波大江山より勧請された十一面観音菩薩立像です。

（定福寺住職　釣井龍宏）

## 国際交流の館　ジョン万ハウス

土佐清水の中ノ浜村に生まれた「ジョン万次郎」こと中浜万次郎の数奇な一生は、まさに雄大な黒潮そのものといえるでしょう。一四歳の時、出漁中に漂流し、無人島で生活の後、アメリカの捕鯨船に救助されました。アメリカでは英語、数学、測量、航海術、造船技術を学び、やがて帰国後、それらの貴重な知識や技術、体験を生かし、幕末の日本に大きな影響を与えました。

ここ『ジョン万ハウス』は、ジョン万次郎に関する数々の資料、遺品をはじめ、友好姉妹都市となった第二の故郷、アメリカ合衆国フェアヘブンの町や当時の捕鯨・航海に関する資料を一堂に集めて展示しています。一五〇年前、四国最南端の小さな漁村から、最初の国際人として語られることになる万次郎のドラマチックな生涯と、彼を育んだ人々のやさしさに満ちたこころに触れることのできる国際交流の館です。

（土佐清水市観光課）

## 佐川地質館

佐川町を中心とした佐川盆地は、西南日本外帯（秩父帯）の模式的な地質構造を示した地域で、古生代シルル紀から中生代白亜紀にわたる各時代の地層が分布し、ダオネラ・モノチスなどの二枚貝やアンモナイト・各種のサンゴ類など、地質時代を決定する上で重要な化石を数多く産出することで知られています。日本列島の生い立ちを探る上で極めて重要な地域であるとして古くから研究が進められ、佐川の地名がそのまま地層名となった蔵法院層群（三畳紀中期）・川内ヶ谷層群（三畳紀後期）・鳥ノ巣層群（ジュラ紀中期～白亜紀前期）は、同時代の地層分類の標準層となっています。

佐川地質館では、佐川盆地をはじめ県内の地形・地質、日本地質学の創始者と言われるエドムント・ナウマンの紹介、国内外の珍しい化石コレクションや動く恐竜（ティラノサウルス・3／5大）、南海地震などの巨大地震を繰り返すプレート運動を解説する動く大陸装置（プレート・テクトニクス）などが展示されており、「地質・化石のメッカ」佐川ならではのミュージアムとして、地球と生命の歴史をいろいろな角度から学ぶことができます。

（佐川地質館　溝渕富弘）

# 活動報告

## 「棚橋賞受賞に思う」

新聞・雑誌というメディアを通して発展し、今ではその経済効果も看過できない規模となっている「まんが」。全国各地で、まんがを専門に扱う施設が急増している。

横山隆一記念まんが館（以下、まんが館）では、この全国のまんが記念館や美術館、またまんがに関係する活動を行っている諸団体を紹介することを目的に、二〇〇四年四月、企画展「知る・行く・遊ぶ　～日本全国まんが巡り～」展を開催した。この調査をすすめるうち、その活動が、商業的な意味での「まちおこし」を目的としている施設・団体が多いように感じられた。まんがのもたらす経済効果への期待があるのではないかと思われたが、一方で、博物館としての機能や意識はどのように考えられているのか。実際の設立の目的や、資料の収蔵状況などはどうなっているのか。まんが関係施設の全体像を把握できる資料は得られなかった。

これを調べるため、企画展協力館をはじめとするまんが関係施設に、「まんが関係施設の実情」と題するアンケート調査を実施した。開館年月日、運営主体、学芸員数、設立の目的や所蔵品、また「まんがによるまちおこし」に対する意識など一九項目について聞き、それを基にして書いたのが、日本博物館協会の機関誌「博物館研究」（二〇〇四年一〇月号）に発表した論文「日本のまんが博物館　その現状と課題」である。

この論文は、大きく二つの内容で構成した。

前半部分では、まんが館の活動として、常設展示などによる横山隆一の顕彰などの概要を紹介すると同時に、「まんがによるまちおこし」事業について述べた。ここでいう「まんがによるまちおこし」とは、単に経済効果を期待するというだけではない。そこに住む人々の生活に「まんが」が溶け込み、それを日常として楽しめる環境作りなど、地域住民とともに作り上げる、文化的意味合いも含んでいる。まんが館は、まんが文化を発信するための拠点施設としての役割を担っており、「こうちまんがフェスティバル」などの活動を展開中である。現在は、市民ボランティアによる実行委員会の活発な議論のもとイベントが開催されるようになっており、様々な問題点を抱えつつも、地域にまんが文化の土壌を育てようと試みている。

後半部分では、全国のまんが関係施設の実情をまとめた。

まんが作品の展示を行っている施設、三一館（まんが館含む）を対象にしたアンケートの結果によると、やはり、設立の目的に「地域への経済効果を期待」を挙げる館が多かった。経済的側面が関係しているのは、まんが関係施設の大きな特徴の一つであるといえるが、まんが館と同様、「まんがによるまちおこし」を「地域住民の文化的要求の充足」と捉える意見も少なくない。一方で、調査・研究を行っている館は少なく、また、資料の整理方法や管理面などに課題も多い。今後、各館の連携、情報の共有などによって解決していく必要があるだろう。

この度、この論文が、日本博物館協会会長らによる選考委員会の議を経て、棚橋賞を受賞した。二〇〇五年一一月一七日、東京都の江戸東京博物館で開催された第五三回全国博物館大会の中で表彰式が行われ、その講評が述べられた。それによると、まんがというこれまで取り上げられなかったジャンルであること、また、まちおこし事業など自館だけでなく、まんが博物館全体について触れ、各館の活動や、課題なども紹介している点が評価されたという。

この論文を発表してからすでに一年以上が経過しており、まんが博物館を取り巻く状況は変わった。すでに閉館している施設、また逆に、新たに開館した施設もある。そういう意味で、この論文はすでに現状に即してはいないかもしれない。しかし、「博物館研究」誌上に掲載された全分野の論文を対象として選考される同賞に「まんが」を題材にしたものが選ばれたことは、まんが文化振興において意義あることではないかと考える。

伝統的な学問・芸術等に対して、サブカルチャーとして扱われることが多く、また、研究対象としての歴史も浅い「まんが」ではあるが、多方面から評価されはじめている。他分野と肩を並べ、文化の一翼を担う存在として、成長してきているといえる。今回の受賞が、まんが関係施設及びまんが文化のさらなる発展のきっかけになることを願う。

（横山隆一記念まんが館　奥田奈々美）

# 時の話題

## 「ギャラリートーク」

「ギャラリートーク」には少し違和感があります。たしかに文学館もギャラリーなんですね。年のせいか「展示解説」の名でやっています。

さて、「森下雨村展」「黒岩涙香展」「北見志保子展」と今年度は、企画展の展示解説は数多く実施しました。予告した日時以外にもご質問に答えたり補足説明をしましたが、あとでアンケートを拝見すると、お客様の中には、「耳障り」な方もあられたようで、なかなか難しいな、と考えさせられました。

そもそも「文学」を展示する、ということ自体が大変困難な作業であります。そこはやはり、館員として学んできた知識と、県民に還元するという責任感と、サービス精神で来館者に対応しなければ、と展示解説を大切なものと考えています。

古今の文学者が生涯をかけた業績を鑑み、文学に精進した真摯な姿を思うとき、非力でも、その紹介と普及に努力すべきと思います。

とはいえ、一層大切に思っている常設展示の解説や解説指導が今年度は十分にできなかったことを、大いに反省しています。

（高知県立文学館　別役佳代）

# コラム

## 子供のための民具体験館

森田　勝瀧

街の子供たちが、自由に出入りして、昔の生活に直接触れることの出来る場所として、出雲大社境内に平成七年に民具館を設置致しました。

当館は、農具を中心として、衣食住に関する高知の山村の民具を収集・展示致しております。

殊に日本の食文化の基本をなす、稲わらがいかに生活の必需品として生活全般に亘って、さまざまな場所に使用されていたか、そのまったく無駄のないエコロジカルな生活態度を、民具をとおして子供たちが理解出来るよう体験実習に取り組んでいます。

体験活動の内容は、稲の脱穀、唐箕を使っての選別、稲わらのわらそぐり、わら縄作り、そして、コマセを使ったわらのこも編み、また石臼による粉曳き、もちつきなどです。

主な展示体験資料は、足踏みムシロ編み機、機織、オガ、石臼、唐箕、足踏み脱穀機、千歯こき、牛グワ、馬グワ、コマセ、ツチノコ、ムシロなどで、古い民家の蔵や倉庫の片隅に大切に保存された、古い道具を、子供たちが手に取り、身体を使って動かすことによって、道具や物の大切さを少しでも感じとって戴けるよう願っています。

## 土佐市立市民図書館

見元　美智

(1)　土佐市の図書館では昭和五二年から市内保育園に、昭和五三年から市内小学校にストーリーテリングと絵本の読み聞かせを行ってきました。物語の中に宿っている精神とこども達が共感することにより「生きる力」を育むことができるということをモットーとし続けてきました。しかし、そのことが以前と違って読書に結びつきにくくなっていることも確かです。特に乳幼児期においてテレビやゲームなどの雑多な映像や音声に長時間さらされることによって人間としての魂そのものの根底が揺さぶられている現実があるからです。本を読む以前のこども達の生活のあり方にも目を向けなければならなくなっています。

(2)　平成一四年に図書館改築計画が持ち上がり、これからの図書館のあり方を市民の方々に理解してもらおうと講演会を開催してきました。平成一五年に千葉県浦安市立図書館長の常世田良氏、平成一六年に長崎県諫早市立図書館の設立に尽力された大塚梓氏、平成一七年には島根県斐川町立図書館長の白根一夫氏に来ていただきました。その間、平成一六年九月議会において改築計画の否決。平成一七年一二月議会において図書館改築請願を採択という経過をたどっています。

## 高知県埋蔵文化財センター

吉成　承三

四国横断自動車道の建設に伴って、中土佐町久礼の西山城跡の全貌を明らかにし記録に残すため発掘調査を、平成一六年一一月から一年かけて行いました。山の斜面部を含めて、城の全体構造の約九〇パーセントを解明することができました。

西山城跡の遺構の特徴は、竪堀と呼ばれる山の斜面に垂直に掘られた空堀を連続して築き並べ、畑の畝の様な形状を示す畝状竪堀群（うねじょうたてほりぐん）という遺構にあります。横方向の移動を遮断するのと同時に下方からの進入を阻止するために効果的に造られた堀です。この畝状竪堀群を備え持つ山城は高岡郡内の山城に多く存在し、天文年間の一条氏と津野氏の攻防の時や、長宗我部氏の土佐統一の頃の戦乱の中、勢力同士がぶつかり合う境目の城であったことを示しています。

発掘調査を実施した西山城跡は道路工事で消えてしまいますが、今回の調査から、西山城からこの地域での拠点的な城である久礼城への変遷、及び周辺の遺跡との関わりをみることができ、また地域の歴史、高知県の城郭史を解明していく上で大変貴重な成果を得ることができました。

## 高知市立自由民権記念館

山田　昌幸

「訪館推進指定校事業」という判りにくい名前の事業を自由民権記念館では平成十三年度から行っています。これは、「学校教育と自由民権記念館の提携を検討する委員会」の答申を受けて始まったもので、市内の小中学校を対象に学級や学年単位で自由民権記念館を見学するときに、公共機関利用の補助や往復のバスの提供をするものです。

これがなかなか好評で、今年度は小学校十二校、中学校二校が指定を受け、多い日には一度に百五十人位来館したり、重なったりするときがあります。そんなときには、ビデオを見る班や第一展示室や、第二展示室から始まる班など五つぐらいの班に分けて対応しています。

また、展示は大人向けになっていますので、学童向けにワークシートや挿絵入の解説パネルを使用します。本館の特色である解説員も、理解しやすい解説を用意して、この機会に大いに日本で最初の国民的な民主主義運動である自由民権の歴史を学んでもらうように努めています。

バスの借上げは半日単位ですので、記念館で一時間ほど見学すると、次は県立美術館や龍馬の生まれたまち記念館などへ回ることができます。学校教育の補完と、来館者の増につながるメリットの多い事業で、続けることで大きな効果が期待されます。

現場通信

# 博物館の危機管理

我々が勤務している博物館に襲いかかる危機とは、いったい、なんでありましょうか。

「死」をも意識させるくらいのとんでもない危機はと申しますと、それはなによりも天変地異であることは云うまでもありますまい。今を去ること八年前、高知県中部を襲った集中豪雨により、我が県立美術館は水没してしまいました。県下で六名もの死者を数えた大災害ではありましたが、館内でも、浸水して満々と泥水を湛えた地下室へ通じるピットに職員が転落し、絶体絶命のピンチに陥ると云う事態が現出いたしました(幸いにして救助されました)。もともと美術館のある地域は湿地帯で、洪水時の遊水地であったのですから、そのような事態は予測できそうなものですが。美術館は国分川と舟入川という二つの川の河口に位置し、川べりには見るからに頑丈そうな堤防がそそり立っております。治水工事は万全のように見えます。あの水害のとき、たしかにこの堤防は川の水を堰き止めたのです。美術館に襲いかかった水は、「想定外」の遥か上流から越堤してやって来て、附近一帯を泥の海に変えながらこの堤防に到達し、ここで堰き止められました。頑丈な堤防はダムの役割を果たしてしまったのでした。

この水害は当時「未曾有」、「百年に一度」と云われました。また経験的にもそう度々襲来するものとは思えません。現にあれから八年、館内に浸水するほどの豪雨はありませんでした。しかし、論理的には、災害が再び襲い来ることの可能性を否定することはできません。県でもさらなる治水工事を進め、また美術館でも、機械室や展示室前に防水扉を設けるなど、ハード的にできるだけのことはやりました(水害の恐れのある梅雨時と台風シーズンには一階の展示室には館外からの借用作品はなるだけ展示しないよう心がけております…)。防災マニュアルも作成いたしました。しかし、「二度と来ないだろう」と云う希望的観測は、それ以上の気構えをさせませんでした。あれほどの被害を受けておきながら、我々は防災訓練を万全に行っていたでありましょうか…。

そんな中、平成一六年四月一日、県立美術館は新しい館長を迎えました。篠雅廣館長は、六、四三三名もの死者を数えた、文字どおり未曾有の大災害、「阪神大震災」の発生時には、渦中の西宮市立大谷記念美術館の学芸課長でした。当時の艱難辛苦については想像を絶するものがあるとお察し申し上げる次第でございます。

さて、館長は就任以来、徹底した職員の意識改革を推進しておりますが、とりわけ「危機管理」については切実な問題としてこれに取り組み、我々を叱咤しながら防災意識の向上に努めて参りました。その結果、館内の要所要所には「これでもか」とばかりに「防災グッズ」が配され、およそ美術館には似つかわしくない黄色いヘルメットやスコップの類は、日々これを目にする度に防災への心構えを再確認させてくれます。しかし見ているだけではもちろん駄目なので、実際に使ってみなければなりません。先日、高知市内でも歴代の観測記録二位という記録的な大雪が降りました。本来は地震発生時等に、割れて飛散したガラスを除去するために使う幅広のスコップが、氷結した雪を除去するのに大活躍したことは記憶に新しいところでございます。

館内の防災グッズ

これまで、水害や地震など、天変地異についてくだくだと述べてまいりましたが、博物館に襲い来る危機はもちろんそれだけではありません。じわじわと攻め寄ってくる虫やカビ、大気汚染などとも、我々は日々これらと戦わねばなりません。また博物館は公共施設ですから基本的に来る者は拒めません。少々言動に「危機」を感じさせる人や酔っ払いなどの来館は日常茶飯事でございます。思えば博物館は常にテロの恐怖にさらされていると云っても過言ではありません。

さらに公共施設ということから云えば、昨今ではサイバーテロの対象となる可能性も高くなっております。例えば、我が美術館に日々送り込まれる迷惑メールの数は尋常なものではございません。事務連絡や問い合わせを遥かに上回る出会い系サイトへの勧誘のメールは、まさに「世の末」を思わせるものがあります。つい二年ほど前までは、「馬鹿者め二度と送るな!」とでも書いて返信すればそれで済んだのではありましたが、昨今ではそんなことをしようものなら、これに倍する迷惑メールが送られてくることは必定となっております。なにより、メールを開いただけで感染するウイルスを嬉々として開発するマッド・サイエンティストどもが世界中で跋扈しております。恐ろしい世の中になったものでございます。

そうこうするうちに、我々の身分を根底的に危うくする「指定管理者制度」という「未曾有」の危機が迫って参りました。博物館の使命を崩壊させる危険性を秘めたこの諸刃の剣に、我々はどう立ち向かっていくべきなのでありましょうか。

(高知県立美術館学芸員　奥野克仁)

高知県立歴史民俗資料館　新収蔵古絵図展

# 『描かれた土佐の浦々』

（平成一七年一一月二六日～平成一八年二月二六日）

土佐山内家宝物資料館　渡部　淳

土佐藩政二七〇年の間に、城や役場などに蓄積された膨大な古文書や絵図は、明治四年の廃藩置県の際に二つの群に分類整理された。一つは、領知判物や将軍家御内書、山内家系図や家臣と藩主の間で遣り取りされた書状など、藩主である山内家に直接かかわる史料群であり、他の一つは、郡奉行や勘定奉行などのもとで役務上作成された帳簿や報告書など、土佐藩の経営にかかわる行政文書である。廃藩後、前者は山内家に引き渡され、後者は高知県庁が引き継ぎ県立図書館に収蔵された。しかし、昭和二〇年の高知空襲で県立図書館は全焼、当然土佐藩史料も灰燼に帰した。これらの史料が、完全な形で現存すれば、土佐藩研究は現在のような状態にはなかったであろう。一方、山内家に引き渡された史料群は、東京代々木の東京侯爵邸と高知市鷹匠町の高知侯爵邸に保管されており、ともに空襲に見舞われたが、堅固な土蔵に守られ、一部が焼失するにとどまった。現存する山内家関係資料のほぼ全てがこれであり、平成一六年までにこれら全点が山内家から高知県へ移管された。

さて、この山内家資料の中心を占めるのは、天皇・朝廷・徳川将軍・幕府諸役人など、中央政権から山内家へ発給された文書であるが、一部家臣の書状や藩政で利用されたと思われる絵図や指図類も含まれている。

なかでも、絵図類は現存数は僅少ながら、正保日本図や国境縁絵図など、絵図史上注目されるべき物が多い。しかし、藩政期の様々な機会に、それぞれの目的をもって作成されたであろう絵図類のほとんどは、維新後に高知県に引き継がれ、戦火に失われたと思われる。

今回、古書店から高知県立歴史民俗資料館が購入した土佐国の浦図約七〇枚は、土佐藩関係絵図の現存状況からも、また、主題図の集積という点からしても注目すべき史料群である。現存する資料の保存と活用のみならず、散逸した関係資料の収集の重要性は現場では理解されていても、現今の状況下で予算措置は容易なことではなかろう。そのなかで、これら重要資料群を土佐へ里帰りさせた歴民館に敬意を表したい。

しかしながら、この絵図群の性格解明と評価は、今後の大きな課題であろう。それは、今回の企画展で担当学芸員が、筆を押さえながら記している解説文からもよく伝わる。資料群に含まれる文化一四年の表書がある絵図袋は、間違いなく藩庁伝来の様式であるが、絵図の一々をみると、記載情報や描写方法も完全に統一されてはいない。というより、実に様々である。しかも、絵図は下灘（西部）の浦方のものが圧倒的に多く、地域的偏りが認められる。藩庁が一つの目的を持って作成された絵図であれば、一定の基準が貫かれる筈であるが、この資料群は様々な浦図を収集した可能性をもっている。しかも、幡多郡沖の島図は、明治七年に同島が全島高知県になるにあたって、愛媛県庁より引き渡された絵図らしく、近代のものをも含む実にやっかいな史料群なのである。

絵図資料の背景には風景があり、我々を具体的な過去に誘ってくれる。企画展では、浦図に描かれた全ての場所で、現地と絵図を比定した写真が展示されており、あたかも土佐の浦々紀行の如くでもあり、実に楽しい展示であった。図録もまた、過去と現在の情報の宝庫となっている。さらに、浦図を地域単位で区切って、数度行われた学芸員解説も、広域にわたる絵図を展示する企画展に相応しい工夫である。

ただ、この難解な史料群の謎解きを担当する学芸員を思うとき、ご苦労様といわざるを得ない。しかし、これも学芸員冥利というべきか。

## 図書の窓

### 「山内一族　一豊と妻の生涯」

新人物往来社
二〇〇五年　一八〇〇円＋税

博物館の役割は、研究や史料の収集整理は当然として、その成果を広く知ってもらうための啓発普及活動も大切である。特に関心の高まる時期をとらえて、一挙に普及を図ることは効果的である。

本書は、平成一八年ＮＨＫ大河ドラマ「功名が辻」の放映を前に、多くの視聴者が関心を持つことが予想される山内一豊と妻の出世物語、土佐藩の成立の歴史を、当地ならではの豊富な史料、古絵図、写真等を駆使して、多角的な視点から分かり易く解説している。コラム欄もよく利いている。

執筆には、郷土史に携わる豊富な人材が、施設や地域を越えて参加し、分担しながらも一体となって歴史の流れを捉えている。これは平成一三年の高知城築城四百年記念の博物館連携展示で培った人脈も一役買っている。

一つ残念なのは本の題名である。確かに内容を表しているが、この機会に土佐の歴史に関心を持とうとする視聴者や観光客にはアピールしにくく、もう一工夫がほしかった気がする。

ともあれ、日頃の歴史研究の蓄積と良く練られた編集の結果が紙面に表れた好個の歴史解説書である。

（高知市立自由民権記念館　西田幸人）

# 情報コーナー

## 展示会

◆高知城懐徳館◆
●土佐二十四万石博特別展
4月1日(土)～翌年1月8日(月)

◆高知県立美術館◆
●フランス近代絵画展
3月18日(土)～5月7日(日)
●海洋堂の軌跡
5月26日(土)～7月17日(月)

◆いの町紙の博物館◆
●―褐色のエメラルド―
山中賢一写真展
3月31日(金)～4月16日(日)
●国際版画交流展
4月29日(土)～5月21日(日)

◆わんぱーくこうちアニマルランド◆
●サンショウウオ特別展
7月21日(木)～8月31日(木)
●サマースクール
7月27日(木)、28日(金)予定
●動物セミナー
12月3日(日)予定
●干支展
12月23日(土)～翌年3月31日(金)予定

◆安芸市立歴史民俗資料館◆
●特別常設展『五藤家出世物語』
～12月27日(水)
●土佐藩主と家老たち
10月21日(土)～11月19日(日)

◆中岡慎太郎館◆
●幕末の遺墨Ⅳ
4月26日(水)～6月26日(月)
●幕末土佐勤王の志士手紙展
8月2日(水)～9月18日(月)

◆高知市立自由民権記念館◆
●鏡川源流の里、鏡・土佐山の自然と文化財展
4月22日(土)～5月21日(日)
●高知県社会労働運動史展
10月20日(金)～11月26日(日)

◆高知県立のいち動物公園◆
●第15回のいち動物公園写真コンテスト作品展
9月18日(祝)～12月3日(日)
●第14回のいち動物公園写生コンテスト作品展
12月10日(日)～翌年2月18日(日)

◆土佐山内家宝物資料館◆
※会場はいずれも県立文学館です。
●花宴・遊楽の世界
土佐藩主山内家の名宝Ⅱ
3月1日(水)～4月25日(火)
●尚武・武道の世界
土佐藩主山内家の名宝Ⅲ
4月29日(土)～6月27日(火)
●大河ドラマ功名が辻特別展
山内一豊とその妻
7月15日(土)～8月31日(木)
●安芸・宿毛・山内共同企画展
「土佐藩主と家老たち(仮題)」
9月16日(土)～10月15日(日)
●埋文・高知城・山内共同企画展
「高知城築城と山内家の暮らし(仮題)」
10月21日(土)～12月25日(月)

◆高知県立牧野植物園◆
●植物からの贈りもの
シリーズ第3回「茶の話」
～5月31日(水)

◆香北町立やなせたかし記念館
詩とメルヘン絵本館◆
●やなせたかしと新感覚抒情派の画家たちシリーズ7　林静一の世界展
3月15日(水)～5月15日(月)

## 新会員紹介

◆特定非営利活動法人
四国自然史科学研究センター◆

四国地方の自然史に関する調査研究・普及啓発に関する事業を実施して、自然環境の保全及び復元、地域の経済的・社会的・文化的発展に寄与することを目的とします。

活動する事業として、①野生生物の生息環境等の調査・研究②自然環境に係る資料文献の収集・管理③生物等の標本の収集・管理等、また普及・啓発事業として学校教育や生涯教育の支援等を実施しています。

【連絡先】須崎市赤碕町46
須崎ビジネス専門学校内
電話　0889-40-0840

## 会員一覧

(入会を希望される方は事務局(県文化推進課 TEL088-823-9793)まで)

安芸市立書道美術館
安芸市立歴史民俗資料館
いの町紙の博物館
いの町立吾北中央公民館
絵金蔵
絵金資料館
NPO法人高知こどもの図書館
NPO法人四国自然史科学研究センター
香美市立やなせたかし記念館
香美市立吉井勇記念館
窪川町立美術館
高知県立足摺海洋館
高知県立坂本龍馬記念館
高知県立図書館
高知県立のいち動物公園
高知県立美術館
高知県立文学館
高知県立埋蔵文化財センター
高知県立牧野植物園
高知県立歴史民俗資料館
高知こどもの図書館
高知市生涯学習課
高知市民図書館
高知城懐徳館
高知市立自由民権記念館
国際交流の館ジョン万ハウス
子どものための民具体験館
金剛頂寺霊宝館
佐川町地質館
定福寺
宿毛市立坂本図書館
宿毛市立宿毛歴史館
須崎市立須崎図書館
竹林寺宝物館
土佐足摺さんご博物館
土佐市立市民図書館
土佐豊永万葉植物園
土佐山内家宝物資料館
中岡慎太郎館
中村時計博物館
春野町立郷土資料館
平和資料館草の家
木遊館　樹華夢
横倉山自然の森博物館
横山隆一記念まんが館
龍河洞博物館
龍馬歴史館
わんぱーくこうちアニマルランド

### 個人会員

林　　一　將（古渓城）


## こうちミュージアムネットワーク通信 第4号

平成18(2006)年3月20日

編　集　こうちミュージアムネットワーク企画調整部会(県立坂本龍馬記念館・横山隆一記念まんが館・財団法人土佐山内家宝物資料館・高知市立自由民権記念館)

事務局　高知県文化環境部
文化推進課　芸術文化班

電　話　088-823-9793